



学校法人
鎌倉女子大学

総選挙を前にして思うこと

—特に学生諸君へ

日本のために与党が勝つのがよいのか、野党が勝つのがよいのか、それは、人それぞれが判断すればよいことです。

しかし、どんな政権を誕生させるにせよ、安定的な政権を作らなければ、国際政治の中の日本の存在感は、ますます弱小化していくであろうということです。殊に世界史的に見て、米ソのパワー・バランスが堅固な時代は、各国はその脅威に晒されながらも、しかし逆にその傘の下に行動すれば事なきを得たわけですが、その傘がはずれて、それぞれに自前で国力を発揮しなければならなくなった今日、アジアの基軸も、日本から中国やインドへ移りつつあるのが実状です。ですから、わが国がいつまでもチマチマとした国内政治的要因により不安定な政治状況が続けるということは、核拡散問題ばかり、拉致問題ばかり、領土問題ばかり、不況問題ばかり、思い切った手を打つことも出来ずに、採用されるべき政策の実現がますます遠のいていくであろうということです。

何れにせよ、今回の選挙は、政権基盤の安定した政治状況を作る選挙にしなければなりませんし、その意味で日本の行く末を占う選挙といっても、過言ではありません。

昨年アメリカの大統領選挙で、何故アメリカ国民がオバマに大勝させたのかという事の本質は、黒人の大統領を誕生させ、21世紀の新しいアメリカの神話を創らなければ、イラク問題で傷ついたアメリカの威信と国益がこのままでは維持されないといった国民の危機意識の裏返しにあったと見ても、そう間違いなからうと思います。

ところが、他方、最近の、いや、何も今始まった話でもないのですが、日本の政治の状況を見るにつけ、ホトホトナサケナイ思いにさせられるのは、国民の意識や行動を大きく左右するジャーナリズムの姿勢です。ことほど左様に、政治家も、ジャーナリズムの顔色を窺いながらの媚びた発言となり、総選挙までたわいない争点に明け暮れることになるわけです。かつて、20世紀を代表する哲学者のカール・ヤスパーズは、名著『現代の精神的状況』の中で、本来ならジャーナリズムは人々の教養や知性の向上に貢献する大変な可能性をもった媒体であるにもかかわらず、そうなり得てはいない実態を「現代の状況の恐るべきもの」といって嘆きましたが、ひたすら断片的な興味と刹那的な刺激を求めて倦むことないジャーナリズムの有り様にはあきれさせられることが少なくありません。

いくら酒に弱い財務大臣がローマで醜態を演じたとしても、シジフォスの神話のように、朝から晩まで同じシーンを、まあこれでもか〜と流し続けることが、果たしてジャーナリズムの本当の役割といえるのでしょうか。たとえ、彼が酔っぱらって会議の内容を覚えていないとしても、その他の出席者の間ではさぞ重要なことも語られたでしょうに、あの

大臣が出席した会議が一体何の会議であったのか、その内容をまともに報じた日本のテレビニュースは、一体どれほどあったのでしょうか。世界にはさまざまなニュースがあるわけですが、日本のテレビ局ほど、一つのニュースをえんえん流し続ける国も、他国にあまり例を見ないところです。これは、ほんの象徴的一例に過ぎません。

良くも悪くも共同体的一体意識の強い日本人の特性とも相俟って、戦前・戦中よりこの方、何事につけ一色に塗りつぶされた論陣をはるのが日本のジャーナリズムの懲りない性分と心得て、私たちは、それらに左右されない政治を見る確かな眼力を養っておかなければなりません。

アレクシス・ドゥ・トクヴィルというフランスの19世紀の歴史家・思想家・政治家がおりますが、彼は、建国を果たした黎明期のアメリカへおもむき、東部・北部を中心にくまなく視察し、帰国して綿密なアメリカ報告書を出版したことがありました。それが、大著『アメリカの民主政治』です。これにより、トクヴィルの名は、世界の政治史に永遠に記憶されることになりました。

この大著の内容を一言で語り切ることに慎重でなくてはなりませんが、それを貫く骨太のテーマは、アメリカの民主政治をモデルとしながら、それに止まらず、その後世界に広がっていくことになる民主主義という政治形態のもつ可能性を分析し、その陥る欠陥を逸早く指摘することにあります。当時のフランスには、まだまだ封建的な旧体制アンシャン・レジームが生き延びていて、早晚民主化されていくべき母国の将来の政治に資するために、現実政治家たろうとした彼が民主政治の特性を広く世に知らしめようと欲した思いは、よく理解出来るところです。

この書の中に、読者は、傾聴に価する幾多の含蓄ある文章を見出すことが出来ますが、中にこういう言葉がありました。「民主政治が政策において理性に訴えるよりも感情に従い、興奮した激情の満足のために長い間熟慮された計画を放棄して顧みないという傾向は、フランス革命が勃発したときのアメリカにはっきり見出すのである」。

トクヴィルの炯眼が民主政治の特性を見抜いたのは、今からもう180年ほど前の、南北戦争も起こるはるか前のアメリカ訪問を機縁にしてのことでしたが、この傾向がますますもって加速され、恐ろしく肥大してしまっているのが、ウルトラ・マス・メディアによって操られる日本の現代民主政治の特徴です。

政策は、複雑な利害を調整する作品であり、政治は、泥中に蓮華を咲かせるようなものだけに、私たちが本当に成熟した国民であるのだとすれば、よほどしっかりした判断力をもたなければならないはずで。選挙権を手にした学生諸君、よろしく頼みますよ。

※ K・ヤスパース 著『現代の精神的状況』（飯島宗享 訳） 河出書房

※※ A・トクヴィル 著『アメリカの民主政治』（井伊玄太郎 訳） 講談社 傍点筆者

[>前のページへ戻る](#)